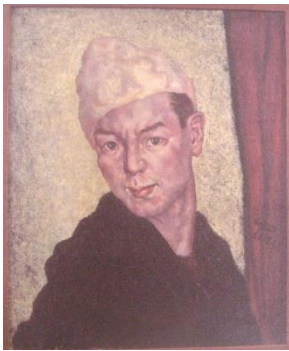


【企画展】『歌人・画家 原田京平故郷浜松に帰る』開催中



1月1日から企画展【歌人・画家 原田京平故郷浜松に帰る】が始まりました。明治28年上阿多古村（現浜松市天竜区）に生まれた原田京平は旧制浜松中学校（現浜松北高校）中退後、18歳で上京、太平洋画会研究所に入所し、山本鼎に師事します。26歳の時に千葉県我孫子に移住し、2年後、志賀直哉邸の留守居役として暮らしました。原田は歌人として窪田空穂に学び、画家として三岸好太郎、節子夫妻らとともに我孫子を描きます。我孫子は白樺派と民芸運動ゆかりの地としてしられ、白樺派の志賀直哉、武者小路実篤、民藝の柳宗悦などが若き時代を過ごしたところです。原田は志賀直哉や柳宗悦らと交流し、短歌では窪田空穂に師事し、洋画や水墨画も描く多彩な人物でした。

「文人」とは詩文、書画などをたしなみ風雅を楽しむ人のことを指します。画家であり、歌詠みであった原田京平は我孫子に暮らした白樺派の「文人」といっても過言ではありません。志賀直哉や武者小路実篤・民藝の柳宗悦等の思いを引き継いだ「文人」なのです。

原田京平は昭和11年40歳の若さで病気でこの世を去るのですが、最後の歌となった「故里の雑煮はかくと云ひければつくりしぞうにの芋のうまきかも」「視力のよわり日毎に加われど念なき妻のみえてうれしき」などが書かれた自筆の『京平ノート』が展示されています。そこには、故郷浜松や家族に寄せる京平の思いが強く感じとれます。



画人 本田庄太郎・原田京平・栗田雄の三人の関係は？



本田庄太郎は明治26年浜松市平田で生まれ、浜松中学校の美術グループで絵の勉強をし、明治43年東京の太平洋画会研究所に入会します。原田京平は明治28年上阿多古の生まれで、浜松中学校を中退し、大正2年に本田と同じ太平洋画会研究所に入会しました。また、原田の友人で同じ年生まれの栗田雄は浜松尋常小学校の図画教員をやめた後に上京し、原田と同じ春陽会会員になります。面白いのは本田庄太郎の自由律俳句の師で浜松の文芸十人の先駆者の一人、加藤雪腸が昭和4年に発行した記念句集「曠野（あら）集」の装丁を本田庄太郎、挿絵を栗田雄が描いていることです。本田と原田は先輩・後輩、原田と栗田は友人同士、本田と栗田は加藤雪腸を通して結ばれていました。大正から昭和にかけて同時期に浜松で生まれ育ち、遠く離れた異境の地で暮らしていた三人の画人たちが、それぞれ故郷浜松にどんな思いを馳せて暮らしていたかと思うと、とても感慨深くなってしまいます。